

屋久島栗生の民家及び集落の現状と町づくりへの展望

土 田 充 義

要 旨

屋久島栗生は江戸時代から重要な港で、藩の津口番所がおかれ、当初の漁村景観が維持されてきた。大規模な漁家が現存し、そのうち江戸期の住居2棟の特徴を記し、景観と共に重要な価値があることを述べた。最後に歴史を重視した町づくりの提言をした。

キーワード：栗生の景観，漁村集落，漁家，津口番所，鯉節の生産地

ON THE PRESENT CONDITION OF THE RURAL HOUSES AND THE SETTLEMENT OF KURINO, YAKUSHIMA ISLAND AND THE VIEW FOR ITS COMMUNITY DEVELOPMENT

Mitsuyoshi TSUCHIDA

Abstract

Since Kurino on Yaku Island has been an important port from Edo period, Tsuguchi Guard Station of Satuma- Han has been established, and the landscape of the original fishing village has been preserved. In this paper, two rural houses of Edo period were selected from the existing large-scale fisherman's houses as the research subjects. The features of these two buildings were described, and the significant value of the two houses as part of the scene was stated. In the end, a community development with emphasis on the history was proposed.

Key words: Landscape of Kurino, Fishing settlement, Fisherman's house, Tsuguchi Guard Station, Producing district of dried bonito flakes

1. 栗生の集落

屋久島の栗生は西海岸に位置し、漁村集落として島内で最も有名である。更に歴史の古さを示す遺構が現存する。離島の民家調査をした時、栗生と船行に江戸期の住居が各2棟ずつ現存した^{注1}。栗生の方は住居の周囲に石垣が築かれ、まとまりのある集落であった。それらの石垣と一体となった歴史的景観を町づくりへと結びつけ、町づくりへの提言をしたいと思って取り上げた^{注2}である。

栗生は江戸時代に藩の津口番所があって、港を出入する藩の取締りをしていた。藩の津口番所は重要な港に設けられ、大隅半島の志布志、甕島の手打にも設けられていた。それらの重要な港には、貢物を納める蔵が置かれ、栗生にも屋久南部最大の御蔵地があった^{注2}。栗生が重要な港とされるには川と港とが一体となり、つまり栗生川の河口が船を定泊させるのに適していたからであろう。この地形的な特徴は志布志港とよく似ている。志布志と栗生との相違は商人の住居である町家があるかどうかで、栗生には現存しないことがあげられる。その代り、栗生には志布志に現存しない漁家があるし、石垣がある。

また栗生は江戸期より鯉の名産地で、鯉節の生産地であった。明治末から大正期になると名産地が大島瀬戸内の西古見に移り、衰退していた。江戸時代から明治期にかけて、繁

栄した当時の遺構が現存し、当時の景観を今尚温存させている。

集落の形態は栗生川に沿って、平行に主要道が通っている。その主要道と直角に5筋程の道が栗生川と結んでいる。それらの道に面して漁家が並び、集落を形成している。幸い、明治20年、大正末、昭和20年頃、昭和40年、平成2年の屋敷割図が記されている^{注3}。それらの図をもとに街路から集落の構造を調べると、以外に時代による変化が少ないことが分かる。簡単な図ではあるが各家の主人の名が記されている。その名からも人々の変動があまりなかったことが分かる。比較的变化の少ない集落で、河口から、少し上流に向い、栗生川に注ぐ、中ノ川と門前川との間が最も古い集落を形成している。その古い集落の道路は先に述べたように、栗生川に平行な道とその道に直角に交わる5筋程の道が、川と陸地を結び、これが栗生の骨格を成している。敷地の大きさは栗生川に平行な道に面した敷地が大きく、川と陸を結ぶ道に面した敷地は比較的小さく、陸に向うにしたがって、更に小さくなるのが分かる。5筋程の道は直線とならず、曲がったり、丁字路になったり、計画的に造られているというより、敷地を割り付けながら道を作っているといった方がよい。つまり、道路を先に計画して、後に敷地を割り付けたとはいえないということである。これは町屋が並ぶ都市とは基本的に異なる。

2. 栗生の民家

1) 岡留重一氏住宅

岡留重一氏住宅は栗生川から少し、陸に入った位置に、玄関を南々西に向けて(写真1)、文久3年(1863年)12月に建てられた。それは壁側の床(トコ)柱に札(写真3)が釘打ちされ、それに年号と屋久島栗生の住民であることを記し、大工が長左衛門であることが分かる。昭和40年の屋敷割図に名前が記され、明治20年には「山崎清兵衛」とあり、山崎氏が建てたのかもしれない。

石垣で屋敷を囲み(写真2)、庭を道側に作る。この方法は麓の武家屋敷と類似する。住宅の最大の特徴は正方形の平面(図1)である。中央に棟を置き、その棟で前方と後方に分け、前方を接客空間、後方を居住空間とし、棟の前方に玄関があり、後方に裏口がある。次に梁間は3間梁を掛けその前後に1間ずつ下屋を出し、合計5間に切妻造の屋根を

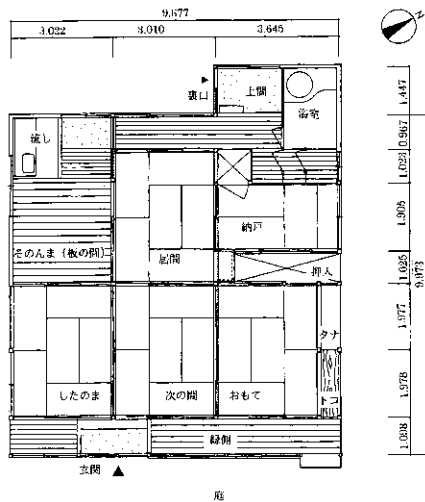


図1 岡留重一氏住宅現状平面図



写真1 正面外観



写真2 石垣



写真3 年号を記す札

掛け棧瓦葺きである．後の改築や増築があるもののよく当初の姿をとどめて価値が高い．

2) 岡留純矩氏住宅

岡留純矩氏住宅は重一氏住宅よりも更に陸側に位置し，弘化2年（1845年）12月に建った．その年号を記す札（写真7）が壁側の床（トコ）柱に釘で止められている．それには「弘化二年巳十二月吉日柱天二高ク建立 屋久嶋栗生御民家主覚市 大工安佐太郎」と記す．

住居の特徴は正面5間，側面5間の正方形をした平面である．それに広い12畳半の居間が棟を軸にしてその後方にある（図2）．その居間の奥に納戸，下手に台所，この3室が棟より後方で，前方におもて，次の間，玄関の間の3室が並び，土間が狭い．玄関は南々東に向け（写真4），おもては中央に1間幅の広いトコがあり（写真5），床は小竹の簀子（写真6）である．押入れや便所を新しく設けたり，改造・増築の箇所も見受けられるが，よく当初の形態をとどめ，江戸期の住宅として価値を有す．

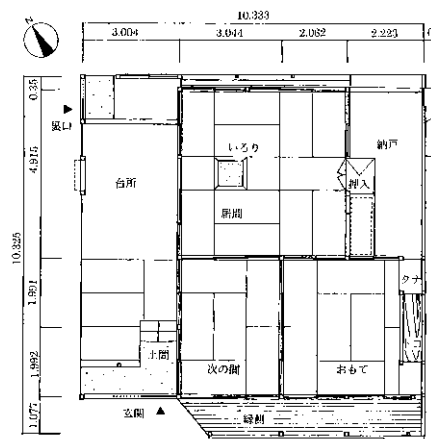


図2 岡留純矩氏住宅現状平面図



写真4 正面外観

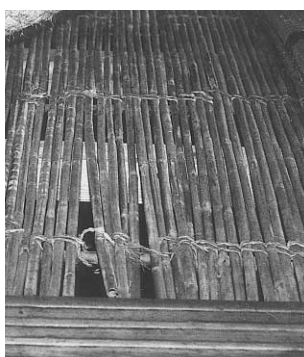


写真6 小竹の簀子の床



写真5 床の間



写真7 年号を記す札

3. 町づくりへの提言

栗生には江戸期からの港として，歴史的価値があり，その遺構から見て建築的価値もあ

る。周辺の人々からは親しまれ、文化的価値も有す。価値があることが何よりも大切であるし、地域の人々がその価値を認め、将来へつなげていく方がもっと大切かもしれない。

1) 遺構を調査する

集落の住居・倉・石垣を悉皆調査する。年代の古い民家2棟だけの調査をしたが、2棟だけではなく、現存する全住居の間取りを記し、各家の配置図に附属屋と石垣を記録する。この現状調査をまず行い、その後、津口番所跡や蔵跡を推定し、藩の施設と漁業に携わる人々の住居とがどんな分布をし、栗生川と港を含めた集落全体の景観をイメージできる配置図を作成する。

2) 歴史を尊重し、町づくりに生かす

農村集落や漁村集落は各地域で似た様子を示している。それは新しく建った住居が似類しているからであろう。各地域にはそれぞれの独自性がある。その独自性を明らかにするためには歴史的建造物群が重要になる。津口番所、蔵、住居、石垣等が復元されて、江戸期の町を呈することができれば、栗生独自の町の景観を示すことになる。但し、地域の人々の生活を尊重し、それが伝統的町並とどう調和させるかに努力することは当然であろう。新しい試みを企画するよりは、ありのままの現実から、現実を作りあげてきた原点に目を注ぐことで、つまり、歴史に目を向けることで、町づくりをする。そこには栗生独自の町となるし、訪れる人々は他の地域では見られない感激を受けるであろう。

3) 他の地域とのネットワーク

鹿児島県内には藩の津口藩所が24ヶ所あった^{注4}。その一つが屋久島栗生である。離島の口之永良部島、七島の口之島・中之島・宝島にもあった。出水市米ノ津、阿久根市脇元、それに志布志・甌島の里・中甌、手打にもあった。それぞれの地域は良港を有し、蔵を設け共通している部分もあるだろう。お互いにネットワークを作り、協力しあえば広がりができる。それぞれの地域の相違も見えてくる。時にはシンポジウムやフォーラムを開催できれば、これは町づくりに参考となるであろう。

4) 伝統的建造物群保存地区にする

福岡県久留米市では保存条例を制定して、草野地区、矢作地区の伝統的建造物群を守っている。遅々として進まないこともある。経費も大変であろう。しかし、伝統的建造物群を守っていくことが大切であると決めた。自分達の町で何が大切か。それが決まれば種々な方法で実行していける訳である。そこで、栗生地区を伝統的建造物群保存地区保存条例を制定して、いかに歴史的町づくりをするにはどうすればよいかを、地域住民を中心に行政も研究者もみんな協力していく。思うように事が進まない。大変である。しかし、歴史的建造物の保存に基づいて、出発する時に、町の変遷過程を捉えることができる。この視点で歴史を生かした町づくりを考えていく。このことが重要であることを指摘し、その順序は1)遺構の調査から順に進めていく。

注1： 鹿児島県教育委員会 平成2年 鹿児島の民家（離島編）

注2： 屋久町郷土誌編纂委員会 平成5年 屋久町郷土誌第一巻 村落誌 上

注3： 注2 46・50・56・62・70ページに明治20年・大正末・昭和20年頃・昭和40年・平成2年の屋敷割を掲載している。

注4： 原口虎雄：昭和56年 津口藩所・異国船藩所

鹿児島大百科事典 695ページ 南日本新聞社・鹿児島、1704年（宝永元年）御答書に津口番所24ヶ所が記されている。